

自己教育力と家庭での学習状況との関連

佐藤みつ子, 森 千鶴

本研究は、看護短期大学生1年、2年、3年次学生245名を対象に、自己教育力形成の一因となる「家庭における学習状況」と自己教育力との関連に着眼し、調査を実施した。その結果、家庭での学習状況は、学習時間が「1時間未満」が多く、学習の計画性は、いずれの学年も「計画しない」が最も多く、特に、2年次生が他の学年よりもこの傾向が顕著であった。「予習復習を毎日行っている」が3年次生が最も多く、家庭での学習状況は学年により特徴があることがわかった。看護短期大学生の自己教育に対する意識構造は、プライド因子、目標達成意欲因子、学習嫌悪因子、自己統制因子、向上因子、自信喪失因子で構成されていた。学習計画は短期群と長期群との間に自信喪失因子で有意差あり、計画の実行では、学習嫌悪因子で「一部計画どおり」と「計画倒れ」との間に有意差があり、目標達成意欲因子で「予習復習を行わない」と「毎日行う」群との間に有意差があり、家庭学習状況は、自己教育力を形成する上で影響していることが明らかになった。

キーワード：自己教育力、家庭学習、看護学生

はじめに

自己教育力とは、自らの目標を設定し、それを自覚しながら、目標に向かって自ら働きかけ、自己統制をしつつ自らの成長を不断に図っていくこととされており、自分を教育する力である。稲川¹⁾は、「自己教育力とは、自分が自分を、自分で自分を教育する力である」と述べている。

また、自己教育力が注目されはじめたのは、26年前のユネスコ総会報告書「未来の学習」で各国の教育改善、改革を貫く一つの柱として「自己学習・自己教育力」があげられてからである。我が国においては、1983年11月、中教審教育内容等小委員会の審議経過報告以来、教育界で用いられるようになり、今や教育上の課題として、自己教育力を育成するための教育のあり方や具体的な展開が模索、試行されている。

このように、自己教育力の育成が重要視されるようになったのは、これからの教育が、情報化・国際化・価値観の多様化・核家族化・高齢化など、社会の変化に主体的に対応できる能力を持つ個性的で、多様な人材を育てる必要があると強調されたからである。また、梶田も²⁾、自己教育力の育成は、たえざる変化に対応するため必要であることを示唆し、自己教育力には、「成長・発展への志向」「自己の対象化と統制」「学習の技能と基盤」「自信・プライド・安定感」の4つ側面をあげている(図1)。

社会の変化に伴い看護教育に求められるニーズも変化してきている。高度で複雑な医療に伴い、それに対処できる判断能力のある看護師、在宅療養者のニーズに応えられる看護師、健康問題を的確に判断し問題を解決できる看護師、創造的な思考のできる看護師、生涯学習し続

けられる能力を身につけた看護師等が求められている。

しかし、看護学生は、自主的・主体的に学ぼうとしないや指示したことはやるがそれ以上のことはやろうとしない等、無気力化の傾向があるとされている。

自己教育力は、学校及び家庭学習においても育成されるものであり³⁾、家庭での学習においては、自らの学習計画(年間、月間、週間)を立て、毎日の生活の中に適切な形で学習時間を設定し、自らの生活を計画に沿ってコントロールし、自主的に学習を進めると同時に、学習状況を自ら反省して自らの家庭学習のあり方の改善を図るという構えと意欲とそのための技能を身につけること

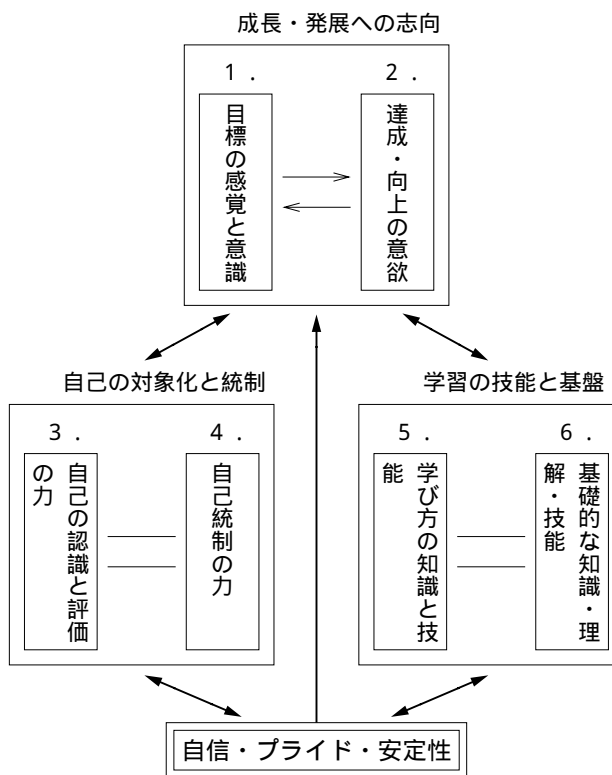


図1 自己教育力の構えと力 主要な諸側面

が必要である。

看護学生を対象とした自己教育力の研究は、少しずつ増加しているが、家庭での学習状況との関連を調査した研究はない。そこで、本研究は、看護短期大学生を対象に、家庭での学習状況に焦点をあて、自己教育力との関連を明らかにすることを目的とした。

研究方法

1. 調査対象

看護短期大学1年次生85名(34.7%, 18.6±0.51歳), 2年次生84名(34.3%, 19.8±0.68歳), 3年次生76名(31.0%, 20.7±0.55歳)の計245名(19.7±1.02歳)である。

2. 調査内容

1) 自己教育力に関する質問項目

梶田は、自己教育力を育てるための構成の柱として4つをあげ、そこから独自の自己教育力の調査項目を作成している。本研究では、梶田のスケール⁴⁾を用い、それぞれの項目に対して、「非常に思う」「思う」「どちらともいえない」「思わない」「全く思わない」の5段階評価

表1 自己教育性調査項目

質問項目

1. 現在の自分に満足している
2. 自分に自信をもっている
3. 他人にばかにされるのは我慢できない
4. 自分がいやになることがある
5. 他の人から尊敬される人になりたい
6. 現在の自分が幸福だと思う
7. 今のままの自分ではいけないと思う
8. 自分の能力を最大限生かすように努力したい
9. 認められなくとも自分の目標に向かって努力したい
10. 自分でなければならぬことをやってみたい
11. 自分がやり始めたことは最後までやりとげたい
12. 社会に出てからよい仕事をし、多くの人に認められたい
13. 自分の志望する進路にすすみたい
14. 何のために勉強するのだろうかといやになる
15. ぼんやりと何も考えずに過ごしてしまうことが多い
16. 人の一生は結局偶然のことで決まると思う
17. 自分のよくないところがよくわかっている
18. 自分の考えや行動が批判されても腹を立てない
19. 自分のよいところ悪いところがよくわかっている
20. 他の人から欠点を指摘されると自分でも考えてみようと思う
21. できるだけ自分をおさえ他人に合わせようとする
22. 腹がたってもひどいことを言ったりしないようにしている
23. 疲れているときは何もしたくない
24. テレビをみてしまって勉強がやれないことがある
25. ちょっといやなことがあるとすぐ不機嫌になってしまう
26. いやになった時でももうちょっと頑張ろうとする
27. 私はなにをやってもだめだと思う
28. 自分のことを恥ずかしいと思う
29. 生まれ変わるとしたらやはり今の自分に生まれ変わりたい
30. 自分にもいろいろと理屈があると思う

法により、回答を求めた(図1, 表1)。

2) 学習状況に関する質問項目

家庭における学習状況は、学習時間、学習の計画性、計画に基づく実行、予習・復習状況、学習方法等である。

3. 調査方法

担当の教員を通じて学生に質問紙を配付し、学生に調査の意図を説明した後、記入を依頼した。質問紙は無記名とし、記入後直ちに回収した。

4. 分析方法

自己教育力の各項目の回答は、「非常に思う」5点から「全く思わない」1点まで数値化し、統計処理を行った。自己教育力の調査項目は、因子分析(バリマックス回転法)を行い、6因子抽出した。家庭での学習状況と自己教育力の調査項目の関連は、各項目ずつ χ^2 検定した。また因子得点を算出し、学習状況別にt検定した。

結果

質問紙の回収は、1年次生75名(88.2%), 2年次生75名(89.3%), 3年次生76名(100%)計216名(92.2%)であり、回収した調査票はすべて有効であった。今回の調査のクロンバクの係数(3学年全体の自己教育性調査項目の信頼性を示す)は、0.74である。

1. 家庭での学習状況

家庭における学習時間は、「1時間未満」と回答した者が最も多く、2年次生58名(77.3%), 1年次生53名(70.7%)であった。3年次生は、「1~2時間」27名(35.5%), 「2~3時間」36名(30.3%)が多かった。学習の計画性は、いずれの学年も「計画しない」が最も多く、2年次生55名(73.3%), 1年次生39名(52.0%), 3年次生31名(40.8%)の順であった。自らの学習計画に基づく実行は、「計画倒れに終わることが多い」102名(47.2%)であり、1年次生41名(54.7%), 2年次生35名(46.7%), 3年次生26名(34.2%)であった。予習・復習を「行わない」と回答した者は、1年次生21名(28.0%), 2年次生37名(49.3%), 3年次生24名(31.6%)である。予習復習を「毎日行っている」と回答した者は、3年次生20名(26.3%)であったが、1年次生2名(2.6%), 2年次生の回答者はなかった。学習方法は、「試行錯誤する」と回答した者97名(44.9%), 「教えてもらう」は48名(22.2%), 「論理的に考える」は36名(16.7%), 「真似る」は35名(16.2%)であった。

2. 自己教育力と家庭における学習状況との関連

自己教育力の調査項目と家庭における学習状況との関連を χ^2 検定した(表2)。項目24「テレビをみてしまって勉強がやれないことがある」と回答した者は、学習時間が「1時間未満」の方が「1~2時間未満」と回答したものよりも多いことが認められた($p < 0.05$)。学習の計画性は、項目24「テレビをみてしまって勉強がやれないことがある」及び項目14「何のために勉強するのか厭になる」と回答した者は、学習の計画をしていない傾

向が認められた ($p < 0.05$)。学習計画の実行では、項目6「時々自分がいやになる」と項目15「ぼんやりと何もせずに過ごしてしまうことが多い」、項目24「テレビをみてしまって勉強がやれないことがある」と回答した者は、学習計画が計画倒れに終わると回答した者が多いことが認められた ($p < 0.05$)。

3. 自己教育力の因子構造

回答された自己教育力の調査項目は、バリマックス回転法により因子分析し、第6因子まで抽出し、得点の高い順に並べた(表3)。累積寄与率は46.3%である。

表2 学習状況と自己教育力調査項目との関連(関連性のあった項目)

自己教育力項目	学習時間			学習の計画性			学習計画の実行		
	χ^2 値	自由度	有意確率	χ^2 値	自由度	有意確率	χ^2 値	自由度	有意確率
6							34.83	12	***
14				21.87	12	*			
15							24.84	12	**
24	28.65	16	*	24.00	12	**	22.13	12	*

* $p < 0.05$ ** $p < 0.025$ *** $p < 0.005$

第1因子は、「現在の自分に満足している」、「自分に自信をもっている」などの因子負荷量が高く現在の自分に自信を持ち、満足しそれが本人のプライドになっていると考え「プライド因子」と命名した。第2因子は、「やり始めたことは最後までやり遂げたい」、「自分でなければならないことをしたい」などの因子負荷量が高く、自己の目標を設定し目標を達成しようとする意欲がうかがわれ「目標達成意欲因子」と命名した。第3因子は、「ぼんやりと何もせずに過ごすことが多い」、「テレビを見て勉強がやれないことがある」などの因子負荷量が高く、学習に対する意欲が低いのではないかと考えられ「学習嫌悪因子」と命名した。第4因子は、「腹が立ってもひどいことを言わない」、「欠点を指摘されると考えようとする」などの因子負荷量が高く、自己の欠点などを統制しようとする意識傾向が推察され「自己統制因子」と命名した。第5因子は、「自分の考えや行動が批判されても腹を立てない」が負に強く負荷し、「他の人から尊敬される人間になりたい」が正

表3 自己教育力の因子構造

因子	因子	因子	因子	因子	因子	質問内容
(プライド因子)						
.812	-.040	.168	.032	.104	-.044	1 現在の自分に満足している
.703	.079	-.040	.030	.073	.194	2 自信をもっている
.608	-.116	.411	-.090	.038	-.080	6 時々自分が嫌になる
(目標達成意欲因子)						
.057	.771	.025	.111	-.052	-.082	11 やり始めた事は最後までやりたい
-.012	.723	.039	-.033	-.133	.153	10 自分でなければならない事をしたい
-.020	.691	.030	-.009	.188	-.105	12 社会に出て良い仕事をし認められたい
.108	.621	.145	.228	-.041	.271	8 自分の能力を最大限伸ばしたい
(学習嫌悪因子)						
.128	.094	.624	-.078	.105	-.173	15 ぼんやり何もせず過ごすことが多い
.157	.068	.549	-.057	-.154	.039	24 テレビをみて勉強がやれない事がある
.014	.060	.520	.031	.343	-.097	16 一生は結局偶然のことで決まる
-.067	.142	.508	-.070	.011	.289	14 何のために勉強するのが厭になる
(自己統制因子)						
.044	-.121	-.047	.690	.097	-.140	22 腹がたってもひどいことを言わない
.024	.112	-.021	.687	.156	.090	20 欠点を指摘されると考えようとする
.088	.165	.010	.610	-.005	.106	17 自分の良くないところを考え直す
.040	.155	.248	.541	-.131	.033	26 厭になったときでも頑張ろうとする
(向上因子)						
.050	.180	-.078	.141	-.655	-.198	18 考えや行動が批判されても腹立てない
.065	.249	.067	.170	.572	-.040	4 他の人から尊敬される人間になりたい
.217	.095	-.131	.268	.437	-.133	19 自分の良い所、悪い所がわかっている
-.092	-.016	.490	.162	-.365	-.114	23 疲れているとき何もしたくない
(自信喪失因子)						
.157	.056	.489	.193	-.075	.510	25 ちょっと厭なことがあると不機嫌
-.187	.135	-.083	-.085	.287	.506	3 他人に馬鹿にされるのは我慢できない
.391	-.011	.393	.273	.228	.462	27 何をやっても駄目だと思う
.348	.207	.146	.281	-.028	.391	30 自分にもとりえがあると思う

に負荷量が高く、自己を律し成長させようとする意識傾向がうかがわれ“向上因子”と命名した。第6因子は、「ちょっと厭なことがあると不機嫌になる」が負に強く負荷し、「他人にばかにされるのは我慢できない」が正に負荷量が高く、自己の自信のなさを隠そうとしている意識傾向が推察され“自信喪失因子”と命名した。

4. 自己教育力因子得点と学習状況との関連

家庭での学習の計画性別平均因子得点をそれぞれの因子で比較した(表4)。その結果、第6因子「自信喪失因子」において、「数日～1週間以内」の計画を立て学習していると回答した学生は、正に負荷し自信喪失が高く自信がない傾向が認められ、「その日のみ」や「学期・月単位」に計画を立て学習している者は負に負荷し、自信を持っていることが認められた(p < 0.05)。

学習計画に基づく実行別平均因子得点をそれぞれの因子で比較した(表5)。その結果、計画倒れになると回

表4 学習の計画性別平均因子得点

項目	N	f 1 プライド	f 2 目標達成意欲	f 3 学習嫌悪	f 4 自己統制	f 5 向上	f 6 自信喪失
その日のみ	62	.204	.081	.071	-.049	.228	-.268
数日～1週間	32	-.051	.127	.225	.325	-.215	.264
月・学期単位	7	-.327	-.124	.261	.011	-.030	-.286
計画しない	125	-.080	-.066	-.107	-.064	-.058	.081

* p < 0.05

表5 学習計画の実行別平均因子得点

項目	N	f 1 プライド	f 2 目標達成意欲	f 3 学習嫌悪	f 4 自己統制	f 5 向上	f 6 自信喪失
全部計画通り	8	.178	.570	.464	-.047	-.381	.538
一部計画通り	91	.140	.106	.197	.053	.020	-.102
計画倒れ	102	-.138	-.099	-.257	.054	-.050	.090

** p < 0.01

表6 予習・復習別平均因子得点

項目	N	f 1 プライド	f 2 目標達成意欲	f 3 学習嫌悪	f 4 自己統制	f 5 向上	f 6 自信喪失
毎日	22	.245	.438	-.219	.082	-.213	.066
2～3日	41	-.112	.148	.159	.099	.109	-.117
試験前のみ	81	.064	.029	-.045	.153	.021	.022
行わない	82	.058	-.219	-.041	-.222	-.019	.019

* p < 0.05

答した学生は、第3因子「学習嫌悪因子」が負に負荷し、学習嫌悪感が低いことが認められた(p < 0.01)。家庭における予習・復習別平均因子得点をそれぞれの因子で比較した(表6)。第2因子「目標達成の意欲因子」において、「毎日予習復習をしている者」は負荷量が高く、「行わない」と回答した者は、低いことが認められた(p < 0.05)。この結果は、3年次学生が最も顕著であった(p < 0.05)。1年次学生は、「試験の前のみ」に予習復習を行うと回答した者が、第4因子「自己統制因子」の負荷量が高く、予習復習を「行わない」と回答した者は低かった(p < 0.05)。

・考 察

教育界においては、これまでの画一性、硬直性、閉鎖性、非国際性を打破し、個人の尊厳・個性の尊重・自由・自律・自己責任の原則を確立することが強調され、学生の主体的な自己活動や学習が重視されている。この考えは、小学校・中学校・高等学校の学生のみではなく、看護教育においても必要不可欠な教育的視点であると考える。

梶田ら⁵⁾の小学生から高校生までを対象とした調査結果では、発達段階が進むにしたがい家庭での学習時間は多くなり、学習の計画性も高まる傾向を述べている。しかし、看護短期大学生を対象に調査した本研究では、2年次生が1年次生及び3年次生よりも家庭での学習時間が短いものや学習計画を立てないものが多く認められた。すなわち、2年次生は、時間的にも計画性においても、学習への取り組みが消極的な者が多く、学年の進行と学習に対する姿勢との関連は認められなかった。

これは、3年次生の方がカリキュラムの進行上で臨地実習が多く組まれており、実習前後の学習を余儀なくされていることや国家試験に向けての学習に取り組んでいるものが多く、これらが関連しているものと推察される。

看護教育においては、自ら課題を選択し、自らの学習計画に基づき学習し、自己責任がもてる学習姿勢の育成が重要視されている。しかし、本調査では、学習計画を立てないと回答した学生が多かった。学生のひとりひとりの学習計画を立てない理由を把握しなかつ

たが、専門的な看護に興味・関心を抱くように動機づけし、学習方法が身につくよう、相談や助言をすることも大切であることが示唆された。

また、家庭における学習時間は1～2時間の者、あるいは学習計画を立てない者、学習計画倒れに終わってしまう者は、テレビをみて勉強できないとの回答が多く認められた。このことは、現代青年の時間の過ごし方の特徴と類似しており、看護学生の場合も自ら考え、積極的に行うよりも受動的に時間を過ごしてしまっている学生が多く依存的な様子がうかがわれた。

さらに、予習・復習を毎日行う者は、目標達成の意欲が高い傾向が認められ、逆に、予習・復習しない者は目標達成の意欲が最も低く、自己統制も低い傾向であった。これらのことから、予習・復習の実践力と目標に向かう姿勢は深い関連があることが推察され、また、自己の目標に向かって毎日努力している学生は、目標を達成させようとする意識も高いと考えられる。

自己教育力を身につけるには、自己学習の仕方が身につけていなければならない。しかし、学習方法では、試行錯誤する者が約4割、2割の者が教えてもらうという結果であった。北尾は⁶⁾、学習の仕方を身につけさせるには、教師主導の授業から学生主体の授業の場を多く設けたり、自らを振り返る自己評価の仕方がわかり習慣化し、自発的に自己評価できるようになることが重要であると述べている。また、先述の教育審議会では、「児童・生徒に学習への動機を与え、学ぶことの楽しさや達成の喜びを体得させる。実物や本物を見せる、体験的学習などの方法を用いる。児童・生徒の能力、適性あるいは興味、関心に配慮すること」が、自己教育力育成のために重要であることをあげている⁷⁾。自らの意志だけで学び続けるという、主体的に学ぶということは、非常に難しいことである。看護教育の実践では、知識を伝達する受動的な教授方法から、自ら考え、習得した知識を活用できる学習の仕方や自立的、自律的で、自ら学びとる能力や態度等、自己教育力を身につけられる教授方法を改革することが大切である。そのため、講義や演習においても、体験学習を導入する等、臨場感溢れる授業をすることや、臨地実習では、カンファレンスを活用し対象者との関わりの中で学習を深めることができるよう工夫する。また、近年、様々な授業では、課題を提示し、学生自身が文献検索し、教師や友人から助言を求め、グループメンバーと協力し合いながら、自らの力で解決し、その成果をまとめ、発表するという一連の学習方法が導入され、報告されている⁸⁾。これらの授業では、思考能力、判断能力、表現能力を身につけ、自ら学ぶ力を育成することを目標としている。

教師は、学生に学び方を教え自己学習を励ます役割を果たし、同時に、学生自身が目標に向かって、自らの学習計画を立て、計画に基づき実施し、自己評価する学習サイクルを促進する役割をもつ。また、主体的学習を喚起し、その原動力となるものは、自分の進歩の跡を自分で確認できる自己評価する条件を整えることが特に重要である。そのためには、評価の視点を明示し、何を評価

すればよいかを具体的に指示したり、どれだけ進歩したかを具体的に確かめられる基準を設けることも大切である。

さらに、学生自身が、自らの学習を進められるよう看護に関する自己学習用の教材や手引きが現在少ない。そのため、自己学習のための要点や注意事項を記述したひとりで学べる教材の開発をすることが課題である。

まとめ

1. 家庭の学習状況は、2年次生が消極的であることがわかった。
2. 看護学生の自己教育力は、プライド因子、目標達成意欲因子、学習嫌悪因子、自己統制因子、向上因子、自信喪失因子で構成されていることが認められた。
3. 家庭学習は、看護学生の自己教育力を育成する上で少なからず影響があることがわかった。

引用文献

- 1) 稲川三郎：自己教育力を育てる指導の実際、黎明書房、70、1987。
- 2) 梶田叡一：自己教育への教育、明治図書、37、1985。
- 3) 前述2) 29
- 4) 前述2) 50 52
- 5) 梶田叡一：(教育の成果分析研究会：新井郁男、梶田叡一、菊地讓司、志村正子、丸山久美子)：第1章 青少年の内的成熟過程に関する検討 自己成長性の発達状況をめぐって (青少年の内的成熟に関する研究；文部省教育研究開発調査研究委嘱事業)、国立教育研究所、8、1975。
- 6) 北尾倫彦編著：自己教育力を育てる先生、図書文化、127 131、1990。
- 7) 臨時教育審議会「教育改革に関する第一次答申案」第一部、教育の基本的考え方、
- 8) Carolyn Mary Byrne、小山真理子(訳)：看護教育方法の改革：PBLの導入、看護教育、37(3)、193 198、1996。

参考文献

- 1) 森千鶴、佐藤みつ子、森下節子、内海滉：看護短期大学学生の自己教育力に関する研究 学年別にみた自己教育力に関するアンケートの所見、日本看護研究学会雑誌、15(4)、25、1992。
- 2) 森千鶴、佐藤みつ子、内海滉：看護学生の学習と自己教育力、日本看護研究学会雑誌(臨)、16、91、1993。
- 3) 北尾倫彦編著：自己教育力育成の実践事例集、図書文化、1995。
- 4) 丸本喜一：自己教育力を育てる、初教出版、1986。
- 5) 波多野誼余夫：自己学習能力を育てる、東京大学出版会、1989。

Abstract

The Relationship Between Self-Education and the Home Study Environment

Mitsuko SATOH^{*1}, Chizuru MORI^{**2}

This study targeted 245 college nursing students (The First-year, the Second-year and the third-year students) to study relationship between self-education and the study environment at home, which is a major factor in self-education.

Asked how long they studied, many responded "Less than one hour ". And when asked how they planned their study activities, the most common response among those who said they studied less than an hour, was "Not at all". This was true of all the three levels, but particularly among sophomores. Juniors were the most likely to say they prepared for class and reviewed every day.

According to the survey, students at each level have their own the characteristic home study environments. Nursing students' awareness of self-education consists of six factors, pride, the will to achieve goals, dislike of studying, self control, improvement, and lack of self-confidence. The lack of self-confidence factor is reflected in significant differences between long-term and short-term planning of study activities. When it came to carrying out study plans, the dislike of studying factor differed significantly between "My plan was partly achieved" and "My plan did not work". The will to achieve goals also differed widely between students who said they did not prepare and review and those who said they did every day. The survey clearly indicates that the study environment at home shapes students' attitudes about self-education.

Key words : Self-education, Home study, College nursing students

* 1 Human Science and Fundamentals of Nursing

* * 2 Clinical Nursing